



学校や家庭の管理から逃れ、 大人の価値観の厚かましい押しつけをはね返し、 中学三年の少年は旅に出る。 その主人公に寄りそい、彼の幸せを願いながら、 共に旅をするような楽しい作品にしたい。 山田洋次



学才

田洋次監督作

十五の頃、あなたの「学校」は、どこにありましたか。生きていくことを、誰に学びましたか。

もう半年、学校に行っていない。 学校がつまらない。家がつまらない。自分がつまらない。 十五才の少年は、七千年の歳月を生きてきた縄文杉に逢いたくて、 無謀にも旅に出る。遠い屋久島を目指し、一人で……。

東京の夜間中学。北海道の高等養護学校。東京・下町の職業訓練校。 さまざまな「学校」を舞台に、懸命に学び、生きる人々の姿を描いて 日本中に感動を巻き起こした山田洋次監督が、初めて教室の外に舞台を移して描くのが、 2000年秋公開の『十五才 学校IV』だ。

主人公は、不登校の十五才の少年。「学校なんて面白くない」「それなのに、なんで行かなきゃならないんだ」― 現代の多くの中高校生の心に一度はきざす、そんな思い。

多くの生徒がそれを何とかやり過ごして学校生活を送る中、彼だけは 器用に折り合いをつけて生きることができない。

とうとう登校することをやめてしまった彼にとって「生きること」を学ぶ場所はどこにあるのか。 はたして「学校」とは、建物の中、教室の中だけのことなのか。

スクリーンのこちら側にいる者のそんな思いをよそに、少年は南を目指す。 ヒッチハイクのトラックを乗り継いで九州へ。船に乗って屋久島へ。

そして最後は、自分の足で険しい山道を登る。七千年の間生き続けてきた縄文杉と会うために……。 それは、観る者の胸をときめかせる冒険の旅であり、時にはその稚さと切実さに胸が痛くなるような旅だ。 いま多くの人が、あるいは癒しを求め、あるいは胸に抱き続けた問いの答えを得ようとして、

縄文杉に会いにくる。しかし、生きることの意味を少年に教えてくれるのは、果たして一本の杉の木なのだろうか。 縄文杉に会いに行く冒険の旅の過程で、彼はそれぞれの場所で必死に生きている人たちに出会う。

年齢も、立場も、境遇も違う人々。旅に出なければ、決して知ることのなかったたくさんの人生。 それぞれが持つ人生の重さ、切なさをかいま見ながら、自分の人生を探す旅

それぞれが持つ人生の重さ、切なさをかいま見ながら、自分の人生を探す旅。 そこには、彼だけの「学校」があった。

ひとは、教室の中だけで学ぶのではない。教師だけに教わるのではない。 十五の頃、「私の学校」はどこにあったのか。大切なことを、誰から学んだのか。 そんなことを自分自身に問いかけてみたくなる、日本映画の名作がまたひとつ誕生した。

製作性性が はいます (1) を はいま

www.shochiku.co.jp

| | | (土) ロード よりショー

丸の内プラゼール 03(3214)3366

03(3214)3366 JR川崎駅東口・駐車場完備 !!

東口・紀伊國屋ビルうら 新宿ピカデリー

03(3352)4043

渋谷幣セントラル

上野セントラル

柏駅東口・ホテルサンガーデン柏BIF 竹柏松竹

賞券好評発売中!一般1500円

将大宮ロキシ

湯りりは一て似

0471(63)0760